中学校一年の部　佳作

対象作品／岩合光昭著『生きもののおきて』筑摩書房

見る

弘前大学教育学部附属中学校　大瀧実結

私には、悪いくせがあります。それは、人やものを見た目で判断してしまうということです。数えきれないほどあるので、自分でもどうすればいいかなやんでいた時に、この本と出会いました。『生きもののおきて』と書いてあったので、悪いくせがまた出てしまい、タイトルを見て世界の動物たちの生き方が書かれてあると思っていました。この本のページをめくる前までは。

この本の著者である岩合さんは、もともと猫の写真家です。そんな写真家である岩合さんは、今から約三十八年ほど前にアフリカの国立公園に滞在しました。アフリカはライオンやゾウ、キリンなどといった動物の代名詞のような生き物のほか、ヌー、ハイエナ、バブーンやヒョウ、チーター。さらにリカオン、鰐。地球で最も哺乳類が多く生息する大陸です。私はこの時点で一つ疑問を抱きました。それは、アフリカの哺乳類にしぼる意味です。数多くの哺乳類が生息するこの世界では、日本で見ることの出来ない哺乳類ばかりだと思います。けれど、私だったらもっと珍しい動物に興味があります。例えば、日本の絶滅危惧種であるラッコやインドネシア、マレーシアに属するボルネオ島の固有種であるテングザルなどを身近で目の前で見てみたいと思います。けれどこのことから、岩合さんは写真家としてアフリカ以外の概念を捨て、あらかじめ想定した通りの場面を撮影するのではなく、野生動物との距離を時間をかけて少しずつ縮め、自分の理想や想像をうわまわったすばらしい写真を作りあげるため、選んだのだと思うことができました。

この後の内容などからは、私の心に強く突き刺さるようなものばかりでした。アフリカにいるのは動物たちですから、もちろん食物連鎖の食べる・食べられるが写真の中に……。その姿をみてしまうと、「かわいそう」や、「うわっ」という言葉が脳内を走ってしまいました。でも、それは人間が牛肉や魚を食べているのと同じように、アフリカにいる哺乳類たちも自分たちより弱いものを食べて暮らす、そうやって動物

たちみな生きていくのだと考えると、私は胸が少し痛くなりました。

さらに私は、著者自身が伝えようとしている「人間による勝手な解釈」いわゆる人は勝手な解釈をして、動物たちを見てしまう。このことについては深く考えさせられました。人間にとって、物事をシンプルに捉えるというのは、もちろん個人差はありますが、私は漢字百個を一瞬でおぼえるのと同じくらい難しいと思っています。年を重ねて知恵や経験がまとわりつくと、より一層難しくなると思います。今までやってきたことや考えてきたことを変えるというのは、よほど覚悟が必要だと思います。

私は、『生きもののおきて』を通して、人や物事や自然界についての考え方が変わりました。自分が知っていること、分かっていることなんて限られているのに、それに固執して先入観をもって、「見る」ことにこだわっていました。しかし、もっと大きな目、世界や宇宙を「見る」ような視点もあることに気付き、たくさんのことを「見よう」と思うようになりました。